

聞き手：「明治」編集部

ハーモニカ奏者
寺澤 ひろみさん

「ワールド・ハーモニカ・フェスティバル2001」
複音ハーモニカ独奏部門優勝

HIROMI TERASAWA

東京都出身 明治大学文学部卒
複音ハーモニカ奏者だった父・博義さんの影響で、「明治大学ハーモニカ・ソサエティー」に入部。博義さんの急逝をきっかけに、独学で複音ハーモニカを始める。2001年、ドイツ・トロッシンゲンで行われた「ワールド・ハーモニカ・フェスティバル2001」にて、ダイアトニック・トレモロ・ソロ（複音ハーモニカ独奏）部門に初出場し優勝。
その後、テレビ・ラジオにも出演、映画でのハーモニカ指導も務めた。音楽のジャンルを問わずハーモニカの魅力を伝えるべく、箏・尺八、吹奏楽、ピアノトリオ、弦楽四重奏など様々な楽器との共演を果たす。現在、全日本ハーモニカ連盟理事、日本ハーモニカ芸術協会師範。「ハーモニカの十種競技者」を目指し、奮闘中。



編集部 ハーモニカを始められたきっかけは何だったのですか。
寺澤 もともと父がバンドマン（ベアシスト）で、プロのハーモニカ奏者でもあり、生徒さんもよく自宅に来ていました。ハーモニカは父がやるもので、最初は自分もやることになるとは思ってもいみせませんでした。音楽自体は大好きで高校では吹奏楽部でパーカッションをやっていました。



亡き父より受け継いだ「複音ハーモニカ」

そんなある日、地元の江戸川区で「明治大学ハーモニカ・ソサエティー」の定期演奏会があり、父に「聴いてみたら？」と言われて行ったんです。その感想を父に伝えたら、今度は「じゃあ、やってみたら？」と言われ、「それなら明治に行ってみようかな」と。電車一本で通えますしね（笑）。

私には「源氏物語」にも興味があったのですが、たまたまその人は源氏物語研究で有名な日向一雅先生のゼミ生で、「いい先生がいるよ」と教えてくれたんです。

編集部 ハーモニカが、明治に進学するきっかけにもなったんですね。

寺澤 そうですね。父は私の20歳の誕生日に、クラシックギターの曲をアレンジした直筆の譜面をプレゼントしてくれました。「今までの経験と情熱をこの曲に全部込めた。時間が

のようになりなさい」というピースがあつて、それがうまい形にはまっていたので今があるような気がします。

編集部 他の楽器にはない、ハーモニカの魅力とは何でしょうか。
寺澤 ハーモニカは、どんなジャンルの音楽も演奏できます。年代を問わず、演奏している方にと寄り添っていきける楽器です。吹いても吸っても音が出て、その人の息づかいが伝わるので、「歌よりももっと歌える楽器」だと思います。

亡き父がつないでくれた、ハーモニカとの縁。
人生の「パズルがうまくはまって、今の私がある。」
「歌よりもっと歌える楽器」の魅力を、
さらに伝えるべく挑戦していきたい。

取れるようになったら、吹いてみてくれると嬉しいって。
その譜面はしばらく机の中にしまっておいたのですが、大学3年の2月に父がガンで亡くなり、遺品のハーモニカを整理しているときに「あの曲を吹かなきゃ」という気持ちになったんです。父が亡くなっていなかったら、ハーモニカを本格的になかったら、ハーモニカを本格的に

やることはなかったと思います。
編集部 そして、大学在学中に「ワールド・ハーモニカ・フェスティバル2001」のダイアトニック・トレモロ・ソロ（複音ハーモニカ独奏）部門で見事優勝を果たしたわけですね。
寺澤 4年生の4月ごろに、母から「10月にドイツで世界大会があるんだ

けど、卒業旅行の前倒しで一緒にドイツに行って、ついでに大会にも出てみない？」と誘われたのが出場のきっかけでした。そこから、父にももらった曲を猛練習して本番でも吹きました。後にも先にも、あれだけ練習したことはなかったですね。でもまさか、優勝できるとは思っていま

編集部 プロとしてやっていく大きな転機になったのではないですか。
寺澤 優勝したら演奏会のオファーがあつたりして、人生が180度変わりましたね。それまでは普通に就職して、いずれ結婚するものだと思っていました。父が、こういう道に進むことを導いてくれたんだと思います。私の人生の「パズル」には、「こ

私が演奏している「複音ハーモニカ」は、1つの音に対して「リード」と呼ばれる発音体が2つ付いているのが特徴で、音に独特のゆらぎや空気感があります。日本では年配者の愛好家の方が多く、広く知られてはいませんが、もっと若い方たち

にも知ってほしいという思いがあります。
現在、「mel-melo（メリメロ）」というチェロとハーモニカのユニットを組んでいます。「mel-melo」はフランス語で、「しゅっちゃんめっちゃか」という意味で、ジャズ、ポップス、クラシック、演歌など、あらゆるジャンルの演奏をやっています。この2つの楽器だけでどれだけのことができるのか、これからも挑戦していきたいですね。

